

私は家事をする

金屋中・1 三浦 優奈

「今日担当の掃除よろしくね。」

「はい。」

返事はするが、内心ではあまり乗り気ではない。宿題をやらなければならないし、早く終わらせようと思い、私はほうきを持って玄関のドアを開けた。

私が夏休みに家事をしようと思ったきっかけは、家庭科の夏休み課題で家事チェックシートをもらったことだ。そこには百個くらいの細かい家事内容がびっしり書いてあった。内容を見てみると、テーブルを拭くなどの普段から行っている家事から、洗い物、浴槽を洗うなどの普段やらない家事まで書かれていた。私は「夏休みだし、普段からやらないこともできるチャンスだ。たくさん家事をして充実した日々を送ろう」と思った。胸が高鳴った。しかし、私はそのとき、家事をすることを甘く見ていた。

その日から、チェックシートに書いてあることを見つけては、率先して家事に取り組んだ。チェックシートにチェックを打てることが、嬉しかったのだ。「自分ってえらい。」「これで満足した夏休みが過ごせる!」と思った。

ところが、人は続けると飽きてくるものだ。夏休みとはいえ、任される家事はほぼ決まっている。毎日同じ家事を妹と交代しながら行うという流れに自然となっていた。何も考えず、与えられた家事を行うことにいつしか、つまらなさと面倒くささを感じていた。ほぼ毎日二時間半の部活動があり、たくさん宿題に追われる。さらには、自分で決めた勉強計画もこなさないといけない。それなのに、家事もしないといけない。あの日のやる気は、日々の疲れにかき消

されてしまった。

私と妹は、とうとう家事分担についてもめてしまった。そこで私たちは家事分担表を作ることにした。玄関、トイレ、ドアの溝、洗面所や二階の部屋の掃除、そして、洗濯物を畳み食器を洗う。これらの家事を、不平等にならないように二人で分けた。正直に言くと、一日に行う家事の数が多くと感じてしまった。決めたからには、きちんとやらないといけないという責任感でますます気が重くなった。夏の暑い中、エアコンのついていない部屋を掃除する日は大変だった。棚の置く場所を替え、隅々まで掃除をしなければならなかった。しかし、部活動後に行くことが多かった。私にはやらなければならないことがたくさんあるのに、家事をすることで時間を取られてしまう。そのため、できるだけ早く家事を終わらせようとした。だから、少し適当になってしまった。それを感じたのは、母が、私にこう言ったときだ。

「ポストの下の植物に水をあげてる?やるんだったら、ちゃんとやって。私がやったほうが早いんだから。」

反論できなかった。何も考えずに、ただ早く終わらせるために適当に行うのは意味がない。そんなことは分かっていたけれど、やらなかったことに後悔した。もともとちゃんとやっていれば、怒られなかったのに、丁寧に行くという、当たり前の条件が改めて心に刻まれた。しかし、やる気は起きなかった。

それでも、私は家事を続けた。いつの間にか習慣になっていたのか、家事をしないことに罪悪感があるからか、自然と掃除をしていた。

家事分担を始めてから少し経ったある日、私と妹は洗濯物を畳んでいた。私は、父と母の服をハンガーから外してかごに入れていた。裏返された服が多く、手間がかかった。

「裏返しの服ばかりで、畳みにくいんだけど。」

半分冗談のつもりで愚痴を言ってしまった。すると、母が怒って

きた。

「文句を言うんだったら、やらなくていい。そういえば優奈、今日二階の掃除やってないじゃん。」

胸の中がぐちゃぐちゃになった。一人になりたくて、すぐに掃除をするために二階に向かった。

意味が分からなかった。「昨日、妹だって二階の掃除をしていなかったのに。」「今日時間がなかっただけなのに。」という言い訳が、私の黒い感情の中にあふれてきた。モップを握る手に力が入る。暑い。汗ばむことが、今の私にはどうでもよかった。妹が私の様子を見に来た。

「昨日掃除してなかったのに、私だけ怒られるの不公平だと思う。ちゃんとやってよね。」

つい強く当たってしまった。いい子ぶって、私の様子を見に来た妹が気に食わなかった。罪悪感が心に残る。すると妹は言った。

「私だって、優奈だけちやほやされて、私だけ怒られたことあったし。」

「そんなことない。」

あったかもしれない。でも胸がざわついて、否定することしかできなかった。

少しすると、また妹が私の元に来た。

「お母さんは、二階の掃除をしてないから怒っているわけじゃなくて、文句を言うから怒ってるんだって。」

「分かってるし。」

分かっているなかった。恐らく自分が文句を言った事実をしっかり見ていなかった。また、文句を心の中で言いそうになったとき、ある日私が妹に言った言葉を思い出した。

「文句を言うんだったら、やらなくていい。」

昔、妹と私が洗濯物を畳んでいたときの言葉だ。全く同じ状況だった。私は、はっとした。あのときの私は、「文句を言う」と自分も気

分が悪くなるから、やめてほしい。」と言った記憶がある。母もきつと同じ思いだったのかもしれない。本当は母が全部行えば、早く終わるだろう。そうしたら、みんな自分のしたいことが早くできる。

しかし、私が一生家事をしないわけにはいかない。私は家事を少しづつ覚えなさいといけなから、させてくれているんだ。それなのに、文句を言うなんて。怒るに決まっている。私はやつと気づいた。よく考えたら、私たちが家事をしても、全て終わるわけではない。そのため、母も忙しい中、家事をしてくれていた。もちろん母が文句を言っているところなど見たことがない。自己満足がなくなった瞬間、自分だけ「つらい」と思い込んでいた自分が恥ずかしくて、ちつぽけなものに思えた。

「文句を言ってごめん。」

私は、晩ご飯の時間に母に謝った。

「いいよ。」

その声を聞いて安心した。

ずっと心の中で愚痴を言い、適当に家事をして自己満足だけで終わっていた私。そんな私はもういない。面倒くさいな、と少しは思うけれど、家族のために、そして自分のために、丁寧に家事をする私に変わったのだ。あのときの胸の高鳴りより、あのときの満足感より大きなものが、今、私の中にある。

「掃除今日の分やってね。」

「もう終わったよ。」